慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	竹内謙二氏訳 国富論増訂版
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1925
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.19, No.9 (1925. 9) ,p.1377(129)- 1379(131)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19250901-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

教授は飽くまでも社會的思想傾向の相對性を信ずるものであつて、其の永久普遍の絶對性を認むるものではない。教授の目的は事物至善の狀態を指摘するに存せずして、事態が現實に展開する不斷の發達過程を闡明するに存する。「何である可きか」及び「何である可きか」の二つの問題の中、教授は單に前者のみに答へんとするものである。教授は理想主義的基礎の上に立てる科學の可能性を拒否するものである。即ち教授は曰く、「私は人類の文化發達の過程に對して何等の理想をも持つことの出來ないものである。私に取つては、人類の文化が如何なる方向に向つて進み來つたか、其の發達の道程の上に如何なる傾向が現れたかといふことだけが問題であつて、吾々が努力によつて到達す可き境地は何であるかといふことは問題ではない。私は所謂『理想鄕』を前提することの出來ないものである。抑も人類文化發達の極度は何であるかといふことは學問的認識の外に在るものと信ずるのである」と。（四頁）。

即ち教授は社會進化の窮極理想を以て吾人の知識に依つて豫見すること能はざるものと做すも、而も社會進化の事實が歴然として存することを認める。（三一頁）。而して教授の見を以てすれば、經濟的文化の發達とは畢竟ずるに「勞働集約の程度增進の過程を指さすものであつて、勞働集約の程度の增進は個性の發達に俟ち、而して此の個性の爲めに分化と平準化との二傾向が絶えず働くものである」ことを縷說する。（二二頁、三二頁以下）。分化の傾向と集化の傾向とは同時現象である。「分化の作用及び之れに應じたる集化の作用と平準化の作用との交代連續の間に社會の進化は編み出される」。（三五頁）。斯くて吾人の社會生活は絶えず窮極の理想に向つて進展しつゝあるのである。而して社會生活の發達に連れて社會思想は分化し、分化したる思想は相觸れ、相當り、相錬磨せられ、全體の力を以て進化の階段を昇り行くのである。（四〇頁）。

教授の所論は極めて明快であつて聊かの澁滯をも見ない。而も吾人をして遺憾を感せしむるものは、教授が經濟的發達の法則を求めんとせらるゝに當つて、其の準備たる可き經濟史的研究の資料を吾人に示さるゝこと尠少なるの一事である。シモラーは曾つて其の著「國民經濟學原論」の第二卷に於て悲しげに人類の經濟生活が一定の畫一性を有し、若しくは畫一なる發達の痕跡を示するや否や、又た何等かの發達を行ひつゝあるや否やを言明すること能はずと說いてゐる。然も吾人は經濟的發達法則確立の可能性を信ずるものではあるが、唯だ其の以前に於て苦心慘憺たる經濟史的研究を要求しなければならぬ。

教授は固より多年經濟史の研究に精進せらるゝものである。而も本篇中に於ける原始家族制度の研究の如き、救貧制度變遷の其れの如き、又たは古代羅馬及び中世獨逸土地大所有制度の其れの如き、或ひは概括的に過ぎ、或ひは斷片的なるの憾みあるを免れない。吾人は更らに精細にして更らに系統的なる教授の研究の披攄せらるゝの機を鶴首して待つ。而も教授は今や發表す可き多くのものを藏しながら、殆んど失明の狀態に在つて百事其の意の如くならざるは我が學界の一大恨事である。吾人は教授が絶大の努力と忠實なる助手の援助とに依つて其の薄倖なる境涯に打ち克ち、其の無限の蘊蓄を傾注して、經濟史的研究に依る國民經濟生活理論の系統的叙述を完成せらるゝの日あらんことを希望して止まざるものである。

（大正十四年六月二十五日發行、合資會社大鐙閣出版、定價金貳圓八十錢）。

竹内謙二氏譯「國富論」增訂版

高橋誠一郎

竹内謙二氏は其の邦譯「國富論」第三卷に於て、更らに Edwin Cannan 版「國富論」を取つて之れが

全部を翻譯し、能ふ限り速かに其の初版、殊に第一及び第二卷を改版せんことを豫約せられた。然るに不幸にも、此の第三卷出版の後、僅かに二十日にして、大震災の厄に罹り、初版の紙型全部灰燼に歸せるを以て、氏は再び勇を鼓して增補訂正の業に從事し Cannan 版の序文、頭註及び脚註中重要と認めたるものを譯出追加し、原著者の肖像並びに Hume 宛書簡の重刷を掲げ Smith の「略傳」「國富論の聲價」「スミスの根本思想概觀」「謂ゆる『諸國民の富の性質』に就て」「スミスに於ける經濟學の大目的」並びに「國富論概要」二百餘頁を卷頭に添へ、新裝を凝して本年七月を以て目出度く其の第一卷を再版せられた。洵に我が學界の慶事である。

氏は「スミスの根本思想概觀」に於て、Smith が利己心及び利他心の兩者を以て社會を結合する二條の帶と做し、「道德情操論」に於ては利他心を中心として社會を見、「國富論」に於ては利己心、即ち是れによる經濟主義を主柱として社會を觀るものと做すの見を採り、「謂ゆる諸國民の富の性質」就て」に於て Smith の謂ゆる「富」が所得としての富か若しくは資本としての富か、又た彼れの謂ゆる「富」が有形財に限らるゝや否やを考察せんとし、「スミスに於ける經濟學の大目的」に於て、Smith の「國富論」を以て「生產の福音書」なりと論じてゐる。其の孰れに於ても新解釋の見る可きものはないが、悉く Smith 研究の忠實なる手引たる可きものであつて、是れ等の諸篇は Germain Garnier を參考せる「國富論概要」と共に Smith 研究者を益すること大なるものである。是れ等に比して著しく見劣りのせらるゝものは最初の「略傳」なるが如くである。

本書の初版が「直譯に過ぐ」るの非難ありしに拘らず、氏が依然として直譯主義を棄てず、飽くまで逐語的に忠實に翻譯し、唯だ生硬を改め、難澁を避けて、只管「流麗なる直譯」を理想とし、推敲に推敲を重ね、彫琢に彫琢を積まれたるは頗る吾人の意を得たるものである。吾人が本誌第十八卷第一號に於て本書初版に就いて云々せる所のものも決して譯者の直譯主義を難じたるものではない。「流麗なる直譯」――原文の文意を明確に傳へ、原文の文品を失ふことなき直譯は亦た吾人の理想である。而して「翻譯の難きは創作の難きに優る」所以も亦た實に爰に存する。前版が「富國論」と號せるに對し、再版が「國富論」と稱したるが如きも全然吾人の贊同する所である。

（大正十四年七月十五日發行、有斐閣出版、定價金拾圓）